

英語における It-Cleft 構文の焦点位置に関する考察*

黒木 隆善

1. はじめに

英語の It-Cleft 構文は、(1)のように、代名詞 it とコンピュータに焦点要素が後続し、更に関係節に類似した構造(以下：分裂節)が後続する。

- (1) It was JOHN that Mary saw. (cf. Reeve (2010: 12))
 it コンピュータ 焦点要素 分裂節

(1)の It-Cleft 構文を、(2a)のような、Rizzi (1997)に代表されるカートグラフィの構造を用いて分析する場合、焦点要素は(2b)のように、FocP の指定部に生起すると考えることができるかもしれない。

- (2) a. [_{ForceP} Force [_{TopP*} Top* [_{FocP} Foc [_{TopP*} Top* [_{FinP} Fin [_{IP} I]]]]]] (Rizzi (1997: 297))
 b. [It was [_{FocP} JOHN Foc [that Mary saw]]]

しかし、It-Cleft 構文における焦点要素の位置が、従来のカートグラフィ分析で想定されている通常の FocP 指定部位置と同じであると想定することについては、慎重な検討が必要である。というのも、(3a, b)に示すように、It-Cleft 構文の焦点要素は、焦点の位置から A' 移動を適用することができるからである。これは、Rizzi (2006)で提案された、(4)の基準の凍結(Criterial Freezing : 以下、CF)に反する事例となる。

- (3) a. What_i was it t_i that you saw?
 b. JOHN_i it was t_i that May saw. (cf. Reeve (2010: 76))

(4) Criterial Freezing

A phrase meeting a criterion is frozen in place. (Rizzi (2006: 112))

本稿では、CF に反する(3)の事例を、Chomsky (2013, 2015)におけるラベル付けアルゴリズム(Labeling Algorithm、以下：LA)のタイミングと、Rizzi (2015)で提案された Maximality の観点から分析する。

2. LA のタイミングと Maximality

Chomsky (2013, 2015)では、併合(Merge)により構築された統語対象物(Syntactic Object、以下：SO)が、概念・意図(Conceptual-intentional)のインターフェイスで適切に解釈されるために、SO に対するラベル(Label)が必要であると論じられており、そのアルゴリズムとして LA を提案している。LA は概略(5a, b)のようにまとめることができる。併合の結果、(5a)のように、SO が主要部 H と句 XP の集合となる時、最小探査(Minimal Search)の結果、主要部 H がラベルとなる。また、句 XP と句 YP が集合となる (5b)の場合は、通常ラベルが決まらないが、XP か YP が移動することによってラベルが決定される(5b-i)、または、XP と YP が Agree 関係にあり、素性 F を共有している場合は、F がラベルとなる(5b-ii)。また、Chomsky (2015)では、(6)に示したように、LA がフェイズ単位で適用されることを想定している。

- (5) a. SO = {_α H, XP} → H がラベルになる (α = H)
 b. SO = {_α XP, YP} → i. XP か YP が移動して、ラベルが決定される (α = XP または α = YP)
 ii. XP と YP が最も顕著な素性 F を共有し、それがラベルになる (α = <F, F>)

(6) LA は転送(Transfer)操作の一部として、フェイズ(Phase)単位で適用されなければならない。

Rizzi (2015)では、Chomsky の LA を軸に、CF をラベルの観点から捉え直している。Rizzi は、Agree 関係を経て素性を共有してラベルが付与された場合(つまり(5b-ii)の場合)、それまで最大投射であった XP や YP は中間投射として取り扱われると想定している。更に Rizzi は、句の移動(phrasal movement)は最大投射にのみ適用されるという一般原理とラベルの関係性から、(7)の Maximality を提案している。

(7) Maximality

Phrasal Movement can only involve maximal objects with a given label. (Rizzi (2015: 22))

LA と(7)に従えば、(8a)のような、以前は CF で捉えられていた、間接疑問文の wh 句が主節の CP 指定部まで移動できない事例は、(8b)のように説明できる。まず、LA によって埋め込み節{QP, CP}のラベルが<Q, Q>となり、それまで最大投射であった埋め込み節内の QP と CP が、それぞれ中間投射の扱いになってしまう。その状況で QP を移動させると、(7)に違反してしまう。これによって、(8a)の非文法性が説明される。

- (8) a. *Which book_i does John wonder t_i Bill read t_i?
 b. *[_{QP} Which book]_i does John wonder [_{<Q, Q>} <[_{QP} which book]_i] [_{CP} [_{TP} Bill read <[_{QP} which book]_i]]]?

ここで重要なことは、(7)が LA に従っていることである。LA は(6)で想定されているように、フェイズ単位で適用される。逆を言えば、LA が適用されない環境、つまりフェイズ単位でなければ、(7)が適用されないことになる。

3. 提案と分析

2 節の想定に従い、It-Cleft 構文の構造を提案する。本稿では、Mikkelsen (2005)の提案した、PredP と vbP を有するコピュラ文の構造に、分裂節が付加している構造を想定する。Mikkelsen (2005)では、コピュラ文の構造を(9)のように想定しており、vb (コピュラ)は非対格動詞の一種であると想定している。この構造を It-Cleft 構文に援用する。(10)のように、PredP の上に FocP を想定し、PredP 内部の XP が焦点要素となって FocP 指定部に移動する。その一方で、分裂節内には島の効果などがみられることから、空演算子(Null Operator)等の移動があり、PredP に付加すると想定する。更に、(10)の構造にラベルの観点を踏まえ、(3a)の派生である(11a-d)を考えてみたい。

(9) [TP Subj_i T [vbP vb(be) [PredP t_i Pred XP]]] (cf. Mikkelsen (2005: 167))

(10) [TP it_i T [vbP vb(be) [FocP XP_j Foc [PredP [PredP t_i Pred t_j] [Op_k that ... t_k]]]]]

(11) a. [_α it [Pred' Pred what_{[Foc][Q]}]]

b. [_β what_{[Foc][Q]} [_{Foc'} Foc [_α [_α it [Pred' Pred t_{what}]] [Adjunct Op_i that you saw t_i]]]]]

c. [_γ it_j [_{T'} T [vbP vb(be) [_β what_{[Foc][Q]} [_{Foc'} Foc [_α [_α t_j[Pred' Pred t_{what}]] [Adjunct Op_i that you saw t_i]]]]]]]]]

d. [_δ=<Foc, Foc>/<Q, Q> what_{[Foc][Q]} C(Foc/Q) [_γ=<phi, phi> it_j [_{T'} T [vbP vb(be) [_β t_{what} [_{Foc'} Foc [_α=Pred(P) [_α=Pred(P) t_j [Pred' Pred t_{what}]] [Adjunct Op_i that you saw t_i]]]]]]]]]]]

まず、(11a)において、PredP の指定部に代名詞が生起し、その補部に wh 句が生起する。その後(11b)のように、空演算子の移動を伴った分裂節が PredP に付加し、wh 句が FocP の指定部へ移動する。更に(11c)のように、vb が併合され、vbP を構築する。この時、vb は非対格動詞の一種であるため、フェイズを形成しない。そのため、この段階では LA が適用されず、したがって(7)の Maximality も適用されない。つまり、what は次のフェイズの段階までは最大投射として扱うことができることになる。そのため、(11d)のように、FocP 指定部の位置から CP 指定部への wh 句の更なる移動が可能となる。また、(11d)の CP フェイズの段階で LA が適用され、{what, CP}の集合のラベルは<Foc, Foc>または<Q, Q>となる。

このように、本稿では、LA の適用されるタイミングがフェイズ単位であることと、Maximality の概念を援用することで、従来のカートグラフィ分析では問題となる、It-Cleft 構文の焦点要素に関する特徴を適切に捉えることができることを提案した。

*本稿は、日本学術振興会科学研究費助成金 基盤研究(C) 18K00654 (焦点化現象に基づく談話インターフェイス統語構造の実証的研究、研究代表者：西岡宣明)及び若手研究 20K13018 (島の効果に対するラベリング分析の可能性についての研究)の援助を受けている。また、本稿の作成にあたり、西岡宣明先生(九州大学)、田中公介先生(産業医科大学)、前田雅子先生(西南学院大学)、下仮屋翔先生(産業医科大学)、大塚知昇先生(九州大学)、及び九州大学大学院生の方々に、示唆に富むご助言をいただいた。感謝申し上げます。

参考文献

- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projections, Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
- Mikkelsen, Line (2005) *Copular Clauses: Specification, Predication and Equation*. John Benjamins, Amsterdam.
- Reeve, Matthew (2010) *Clefts*, Doctoral dissertation, University College London.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (2006) "On the Form of Chains: Criterial Positions and ECP Effects," *Wh-Movement: Moving On*, ed. by Lisa Cheng and Nobert Cover, 97-133, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (2015) "Notes on Labeling and Subject Positions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 17-46, John Benjamins, Amsterdam.